草思堂随筆

窓辺雑草

折々の記　他

吉川英治全集

第47巻

編纂委員

川口松太郎
川端　康成
小泉　信三
小林　秀雄
佐佐木茂索
獅子　文六

講談社版

著作権者の了解により検印廃止

吉川英治全集・47　草思堂随筆

著者　吉川英治
装幀者　杉本健吉
発行者　野間省一
発行所　株式会社講談社　東京都文京区音羽二―一二―二一　郵便番号一一二　電話東京（〇三）九四五局一一一一（大代表）　振替東京三九三〇
印刷所　凸版印刷株式会社　製本所　大製株式会社
本文用紙　日本パルプ工業株式会社特漉
第一刷　昭和四十五年六月二十日　第六刷　昭和四十九年五月二十日
定価は箱に表示してあります
© 一九七〇年　吉川文子　（文2）

目次

草思堂随筆　三
窓辺雑草　一二六
草思堂雑稿　一九三
草莽寸心　二一三
折々の記　二三三
折々の記以後　四〇三

草思堂随筆

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

草思堂随筆

斎の窓外にとびだしている蹠音のあらっぽい、反古もあるが、風のいたずらである、亦一興と思って、それも省かなかった。

○

書き反古の崖に飛んだり今朝の秋

著　者

昭和十・九月上浣

序

柳里恭とか、南畝とか、古人の随筆には、どれにも閑余の手すさびという趣が見え、書く者も楽しみ、読む者も楽しむ所の愛日愛書の閑境をおのずから創っているが、僕ら市井の騒人の手にかかると、閑談も閑談になりきれないし、茶話も茶話に至りきれない、いわゆる半蟬半脱の類になる。

それのみでなく、僕にはまだ、随筆を書く年齢に到っていない、四十が初惑と実際に考えているのである、嘗ての体験なり社会観なども、面はゆいものと思っている、いわんや、雑学的なせまい抽斗から、百味の滋をとり出して、物読みに倦んだ人人をたんのうさせるなどは思いも及ばない事だ。ただ、大衆文学というもの以外に随時に書いた雑筆には、ふだん向きあっている「衆」とは後ろむきな自分が在る。独りぎりの自分というものは、この著書以外まだ持たないから、一冊ぐらいはあってもよかろう、そう考えて纒めたのである。

雑草を掃きよせたのと同じで、あれこれと、整いもつかないので、その時折の雰囲気の中で新聞などに書いたものには、書

日曜夕語

鮭

鮭が街を歩きだすと、街は木枯しになる。歳暮の紙の札を鼻につけた贈答品としての鮭は、都会では近年流行らなくなったが、濃厚な酒食に飽いた正月の後口には、やはり鮭茶漬などは、気を変えるので、蕪村の句の

から鮭や帯刀殿の台所

でなくとも、たいがいな家庭には、あの老僧めいた枯淡な風貌が、一尾位い台所に吊るされてある。

×

鮭が膳についていると、何時でも思い出されるのが、孝明天皇の御逸話である。

嘉永、安政の頃の皇室の御窮状は、誰でも知っているが、今の民衆には、もう想像も及ばない程、遠いことになった。所

で、その御逸話というのは、ある時、某大名（毛利氏と伝う）が天皇の御日常の供御が、あまりにも貧しいのを知って、そっと、数尾の塩鮭を献上したというのである。

天皇は、賞玩つぶさに、美味美味とお欣びになって召上った。そして、女官が、御膳をさげようとすると、まだ残っていた鮭の端が惜しまれて、

『残片捨つる勿れ、晩酌の佳肴にせん』

と仰しゃったという。

×

この御逸話を、玩味すると、当時の天皇の御生活ぶりがよくわかるし、またそうした不合理性社会が、維新の招来に、根本をなしたことも自らうなずけて来る。同時に、僕らの食膳にある鮭の一片にも、もう少しかみしめてみると、美食の後の鮭茶漬以外に、もっとべつな味が出てくるのではあるまいか。

×

現代の都市生活や、生産機構の上からいえば、消費は道徳なり、という理窟も立たないことはないが、そう大びらに消費階級が誇るには、あまりに済まない気のする同胞が都会以外に多すぎる。せめては、鮭の一片にももうすこし、感謝と、真味をつぶさにして、舌へのせるべきである。

×

キャフェーで消費される洋酒、宴会から宴会へと鼻につく佳肴、家庭の内も外も、正月は残肴が山をなして芥箱に満ちている。まことに、聖代である。しかしながら東北の飢民（きみん）というのはいったい日本の内の話であろうか。

訪問客

病室にスチームをたてて六十度の温度を保ったまま、この二十日あまりを寝たきり暮らしていたので、戸外は相変らず霜がおりているようにばかり思っていたところが、この三、四日ほど前から、毎朝、家の庭でウグイスが鳴く。

時計を見ていると、きまって朝の七時から八時半頃の間に来て、約三分間程鳴いて去るのである。

『あ、今年も来た』

と、私は思いがけない知己の見舞いをうけたようにほほ笑みを覚えた。

×

私の家は、市中の、しかも下町のまん中にあるのであるが、四隣に樹木の多いせいか、毎年今ごろになると、約束をしたように、藪ウグイスが朝々訪れる。越して来てから五年目になるが、ウグイスは、今年も忘れずに訪問してきた。

×

もうひとり、夏の六月頃になると、きっと門に立つ虚無僧（こむそう）があって、私には、尺八の譜を聞きわける耳がないが、何となくこの虚無僧のは、銀座裏のキャフェーや酒場わたりをして歩くのとは違うような風韻を感じるので、いつも半紙につつんだ布施をすると、古風に会釈をして三十分間ぐらい長々と吹いて立ち去る。

その男がくると、

『あ、一年たった』

と、いつも思う。

×

煩にたえない訪問客のうちでも、こういう訪問者には腹がたたない。年ごとに待たれてなつかしいものである。それと病中に「面会謝絶」を貼り出されて、他人に隔離されて見ると、病室にもれてくる玄関の声もいちいちなつかしく、しみじみと平常の人々を考え直す。

×

近ごろ日本には、中華民国の色文を持った訪問者がだいぶ来る。また、オリンピックの飛電だの、大観光客を迎えるホテルの計画だの、客は門前に市をなすありさまで、殊に、民国政府の使いには、朝野をあげて、一陽来復をうたっているが、幸いに後でまた腹を立てたり、風邪でも引かなければよいがと思う。

×

日本ほど、もの喜びをする国はなく、また日本ほど怒りっぽい国もすくない。軽忽にぬか喜びをするからである。そこへ行くと、ウグイスと虚無僧は、いつも同じ音いろしかもたらして来ないが、後で腹の立ったためしはない。

郷土文士

封建政治といっても、いい所はあると思う。中央集権の弊が極端にあらわれて来た今日ではやはり昔の藩制度などには、今日にない特徴があったと思う。

×

藩風というものの下に、地方文化が一団ごとに厳存して、常に隣藩に対して、下らない襟度を持っていたなどもその特徴であろう。

たとえば、仙台には仙台の文化があり、水戸には水戸の文化があった。音楽にしても、美術にしても文学にしても、自己のものを持っていた。思想においてすら、同じ勤王といっても、水戸学のそれと、薩摩や長州のそれとは、甚だ違った派生であるし、武士道といっても、佐賀は葉隠を持ち、赤穂浪士は山鹿の士道をもち、おのおの特徴のある人文を持って「わしが国さ」を競っていたかたちである。

×

現代の郷土は、精神的に空っぽである。思想は愚か、小原ぶしやおけさ節や、娘まで、都会に捧げて了って、その代りに、生活苦の百姓家の軒端で、鼻ったらしの子が謡うのを聞けば、

あたしこの頃へんなのよ、

であり、また、

ラッシュアワーで逃げましょか

である。

×

どうかならないものかしら、中央集権文化の殷盛はもとよりよみすべきだが、急速な近代発達は、都市と地方とにおいて、現状ではびっこである。封建の精彩や物質はないまでも、音楽や美術や文芸の恩恵を、地方にももっとあらしめたい。

×

そういう点で枯渇している郷土にあって、郷土に貢献した隠れた文士の功績を僕は認めたい。去年だか、常陸で死んだ横瀬夜雨氏だの、越後の相馬御風氏だの、また信州の高倉輝氏だの、何等ジャーナリズムからは酬われないが、文人として、あ

あいう存在も、たしかに一見識であり、地方文化の一助である。

×

原稿が売れなくなっても、何でもかでも、文士は都会にいなければならないという理窟はない。故山に帰臥して、老軀を地方文化のために終るなども、いい晩年ではあるまいか。

主婦失業者

いくら正面では強がった顔をした男でも、うしろ姿を見ると、もろいのは分る。殊に、家庭不安のある人など、社会では、強いて快活をよそおっているのが多いけれど、うしろ姿には、隠しきれない影がある。

×

近代の吾々良人群（ハズバンド）には、同病相憐れみたい人が実に甚だ多いのではないか。真に「うしろ姿の幸福」な良人が、社会の夫婦実数の何パーセントあるか。これは、統計にも出て来ない。

×

しかし、主婦の罪とのみ責めようというのではない。お互の問題として考えたい。さし当って主婦生活の中に生じた有閑という新熟語について考えて見ても、僕等を育てた母の時代と、今の主婦とは、時間において、比較にならないほど、退屈を持っている。

×

百貨店（デパート）は主婦から針と水仕事を取り上げてしまった。引っ越して、御用聞きに来ないのは、書籍店（ほんや）ぐらいなものであろう。最低サラリーマンでも弁当などは持たない。赤ん坊を育てるにも、お湯さえ注げば乳になる栄養料が何十種も出来ている。女中、家政婦、電話、台所電化。良人の収入が増すに従って家庭は科学的にととのい、そして主婦は失業する。

×

科学の進歩が各国に失業群を増大しつつある原則の中に、個個の家庭内でも、優にやさしくとも、しかも厄介な、解雇し得ない失業者を一人ずつ抱えてゆくことに、将来、いよいよ、なるのではないか。

といって、山内一豊の妻も、中江藤樹の母も、今日の女性の範とはならない。針をもって靴下の穴を深夜までつくろうことが、決して、今日の貞女ではなくなった。家庭の科学化から生じた余剰時間を、良人と子と自分のために、いかによく使うかという問題に、近代主婦は時代的なテストをうけている。

×

ダンス場や銀座界隈に、その時間を消費できるぐらいな単純さで一生すむならよいが、勇敢になれない失業主婦は、結局「うしろ姿のもろい良人」を朝な朝な社会へ送り出すことになる。日曜日にでも、良人もひとつ、考えてみる問題ではなかろうか。——いや他人事（ひとごと）ではないけれど。

高野往来

七年ほど前に、高野へ登った時には、一山の僧が、「山上までケーブルカーを軌くの可否」について、その昔の山法師のように、賛否二派に対立して、

論議していた。

×

それから四年後に、登ってみたら、もうケーブルが完成していて、高野は、低地社会の延長になっていた。参詣人は、花見客のように殺到し、夕方になると、多くは日帰りで麓へ去ってしまった。

ケーブルを軌けば、参詣がふえる、参詣がふえれば寺に泊る旅客が増す、という経済観から出発した坊さん達は

『こんな筈じゃなかったが』

と、当のはずれた顔をしていた。

×

一昨年、三度目に登ってみたら、ケーブルが出来たので、食えなくなった橋本口の腰掛茶屋だの、尻押だの、人力車だの、また大阪あたりの百貨店の進出で、脅威をうけた山上の小売業者だのが、労働争議に似たような大会をひらいて、説教する坊さん達に説教を聞かせていた。

×

次に、去年の春先に、登ってみたら、山上の道路をひろげるやら、青バスが走るやら、各寺院では、競争して、大きなバラックを建築している。

『たいへんな復興景気ですな』

と、懇意な方丈にいうと、

『そうです、今年は、弘法大師の千一百年忌ですから』という。

聞けば、全国の信徒が、何十万と登山する見込で、宿房の増築をやっているものの、もしこの思惑がはずれたら、借金で、夜逃げをするお寺も出来るかも知れないという怖いような話。

×

その後の事は、聞きもしないし、これから先は、高野へ登ってみる気もないが、どこの法城も今は、ざっとこんな時代らしい。戦国の頃、根来や叡山を焼き討ちしたのは、織田信長であったが、現代は、資本主義が、仏法僧の巣までをたたき落としてゆく。宗教復興とは、その鬨の声か。

遺族さまざま

三月号の「話」か何かに、夏目家の売立というみだしで、漱石未亡人や遺子たちの行状が出ている。遺族たちの黄金生活と、その近状は、平家の公達や女房のくずれにも似てはかないことに落ちているが、世界一貧乏村で鳴っている日本の文壇とすると、これは一体、外国作家の遺族の話ではないのかと疑われるほど、たった一つの豪華版である。

×

それとは比較にならぬ小やかな遺産だったが、岩野泡鳴の建てた巣鴨の家には、震災後もまだ泡鳴の蔵書がぎっしり書架に背を並べていた。ところがある日、一冊を借覧しようと思ってゆくと、英枝未亡人が、つい数日前に、みんな払ってしまったということであった。

その時、借りに行ったのは「琉球演劇脚本」であった。ほかにも、稀書が多かったので、早速売払ったという古本屋へ行ってたずねると、これがひどい屑本屋で、その日に、市でたたいてしまったという。

×

泡鳴が、好みの指物師に作らせたという黒柿の数寄な原稿抽斗だの、弓の道具だの、碁盤だのを、屑屋が肩に担いで、庭か

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ら出てゆくのを見たこともある。五十銭銀貨が幾つか、未亡人のいる縁側の端においてゆかれるのだった。

×

清川八郎の孫にあたるという青年が訪ねて来て、文壇人や名士の色紙半折をもらって、八郎の慰霊祭の費用にするのだと僕にも求めて帰って行った。

その青年の面ざしが、八郎の肖像にどこか似ていただけに、さびしい気がした。

×

頼山陽の曾孫にあたる頼成一が、ある折、つくづく歎じて僕にいうには、

『名家の遺族ほどつらいものはないですよ。いくら私が勉強しても、山陽をしのぐことは出来ないし、すこしまずいことでもしでかすと、祖先の名をけがすといわれますからな、まったくやりきれません』と。

×

こんなことを書いている所へ、偶然、亡友佐々木味津三の未亡人から、故人の全集が終ったことの礼状に添えて、何か、贈り物らしい小包がついた。

物をもらったからいうのではないが、良人の死後、故人の友人にまで、心をつかうことは、遺族の境遇として出来難いことであると思い、そういう人にかしずかれた亡友の幸福さが何とはなく、いい心もちで思い出された。

そうそう、やがて、直木三十五の一年忌も近い。

蘭三態

箸を持って、ふと、刺身の鉢をのぞいたら、鯛の白い作り身の上に、子指の先ぐらいな蘭の花がツマにのせてあった。春宵の燈下に可憐な姿態をしている、満洲美人の耳の色のようにほの紅い。

噛んでみたらホロ苦かった。蘭の花は食べられるものかどうか知らないが、食べてみたくなったので食べてしまった。

幽谷に、蘭を見て

『王者の香』

といい、童子の琴をとって、直ちに、蘭の譜を弾じたという彼の孔子がそばにいたら、さだめし僕の不風流を怒って、

『豎子、禽獣の胃を持つ』

と嘲殺したであろう。

×

蘭で思いだす話は、信州の堅崗和尚と児玉果亭との交友である。ある時果亭が

『和尚、ひとつ描いてやろう』

というと

『絵など、寺にいらん』

と無慾な堅崗はいう。

無理に、描かせろと、果亭がせがむと、和尚は、

『それなら、これへでものたくれ』といって、汚れた鼠甲斐絹のケサを前へつきだした。

果亭は、一気に、蘭を描いて、

王者之佩

と、自讃を書きそえた。

堅崗は死ぬまで、ぶらんぶらん、そのケサを掛けとおして、顔を拭いたり、酒を拭いたりしていたそうである。いかにも、王者之佩という風があるではないか。

×

四、五年前から、東京では街の君子の間でも、蘭が流行っているらしい。一頃のさつきの流行にかわって、銀座の花卉店などでも、蘭の会がよく催される。花さえ食慾で見る僕にはもとより、その方の趣味はないが、一鉢五百金、千金という値を見て、街の君子の豪奢な風流にはおどろく。

りんご

どこの帰りであったか、阿部真之助と浜本浩が、車中で林檎論をはじめだした。

阿部翁は、林檎は朝鮮の大邱産が香味とも冠絶であるといい、浜本浩は、青森に及ぶものがあるかと力む。

弄舌の大家と、詭弁の雄が、ゆずりあわないまま約二十哩ぐらいは争っていたが、結論は、そのうち東京でということで降りたように覚えている。

×

その折、中立であった僕も、林檎を手にとるたびに、それからは、これは大邱か青森かなどと、つまらない歯ざわりが一つふえてしまった。で、その後の自分の聞きかじりによると、大邱産といい、青森産といっても、インド種か、アメリカ種か、在来種か、その系統からいうのでなければ、上海の馬と、根岸の馬と、どっちが早いかという点について議論するようなもので、なるほどこれは、阿部真之助と浜本浩ででもなければ、口角から泡をとばせない問題であると後では感心した。

×

いくらうまい料理をくわしても、後口の果物ではたいがいなホテルや一流の店でも、ぶちこわしが多い。わけてもモダンお婆さんのように、紅くばかり見えて、ふかふかなのは参る。旅行して西へ行ったら、食堂の林檎は手にとれない。

×

苹という字があるが、林檎とどうつかいわけるのかと、事のついでに、辞書をくってみたら、林檎は東洋在来種で、苹の字は欧米種に用うとある。

誰がきめたのか、大へんな定義があるものだ。日本人を見て、これは漢人系、これは隼人系、これはアイヌ系と見わけるがごとく、この使いわけはむずかしい。

×

近年の贅沢林檎は、黄色りんごのデリシャスとか、アメリカ産のスタアキングなどだそうで、値は林檎一箇が、ほぼ市役所の雪かき人夫の一日の日当にちかい。だが、林檎のうまさといえば、なんといっても、南津軽あたりの旅の道で、林檎畑の娘たちからほうってもらった生木のようなのを、皮のうえからがりっとやる味である。青い汁が眼へ走って、りんごを眼で食ったという感じがする。

ふる手紙

手紙というものは、読んだ後は、すぐ焼いてしまうべきものか、あるいは、保存しておいた方がよいものか、いまだに自分は迷っている。この間も、安成二郎が来て、手紙講座にのせたいから何かおもしろい手紙を貸してくれというのであったが、さて誰に見せてもいいような無用な手紙などはないものである。第三者に示しては、何かさわりのあるものが多い。それならやはり焼いてしまうに越したことはない理であるが、親しい友のもの、特殊な心のこもった書面など、つい焼かれないものである。

×

べつにどういう目的もなく、自然にたまったのであるが、自分の家には、引っ越しの度に、置場に困る程な古手紙がある。自分が十九歳の時から今日までの重なる手紙で、旅行用の大きな信玄袋二つと、大小の柳行李に二つか三つ位いあって、母のも、父のも、恋人のも、また恩人や知友のも、すべて糸で束ねては詰めておいたのが、いつの間にか、始末にならない程なかさになってしまったのである。

×

女から来た手紙に、父が附箋を附けて、それへ赤鉛筆で「いいかげんにせよ」と書いてあるのなどもたしか混っている。その他ずいぶん自分にとっては赤面のものもあるし、今は知名の士で、世に出ては工合の悪かろう文通もある。折があったら、どこか武蔵野の原へでも持って行ってきれいに焼いてしまおうと思う事が屢々ないではないが、子に甘かった母の手紙など思うとやはりもう一度閑日にゆっくりひろげて母の乳の香をしのびたいなどという慾も出る。どうして、その時ごとに焼いてしまわなかったかと、その負担に今では悔いているのである。

×

それに近頃は、古本屋から古書目録などを送って来るのを見ると、すこし社会的に名のある人間の手紙には、最低五十銭位いなところから二円、三円と市価がついているからおそろしい。賀川豊彦が七十銭だったり、佐藤春夫が一円二十銭だったりする。直木三十五のもたしか一円幾らかで出たことがある。

×

これが差出人と宛名人がよいとなお高いというのである。去年九条武子から佐佐木信綱へ宛てた手紙がやたらに古書市場に出て、初めは珍重がって四十円ぐらいに売買されたのが、あまり出るので十五、六円にまで暴落したということをある書店の主人がきて話した。どうしてそんなに同一人の古手紙が売りに出たのかというに、夏の大掃除か虫乾しかに、紙屑屋に一行李盗まれて行ったものであるとのことであった。こういうことを考えると、値の有無などはとにかく、やはり、草の枯れている今のうちに、武蔵野へ持って行って、一度焚き火をしてしまうに限ると思うのであるが、風邪をひきこんで、あの霜解けの道を思うと、毎年、そんな勇気も出ない。いっそのこと、一度火事にでもあったら、さっぱりするだろうなどと思う。

春場所寸言

文楽復興だの、文芸復興だの、小グループ相手のものは、みな途中であえいでいるが、角力復興は、一時の衰退を盛り返して来て、今年の春場所あたりは、やや往年の角界全盛期に近い頃をしのばす景況にあるらしい。

×

梅、常陸のコンビや、駒と太刀との撲撃や、あの頃の角力を少年時代に見たぎり、僕などもここ二十年近いあいだ春場所にも夏場所にも、角力というものを見たことがない。

嫌いかといえば、嫌いでもない感じがするのである。そのくせ、そんなにも永い間、場所をのぞいたことがないのは、やはり時代が角力を迂遠にさせたのであって、それに代って来た輸入スポーツなり、また拳闘のようなものが、角力を離れたものを満たしてくれたせいもあろう。

×

だが、野球にも、競馬にも、拳闘にもない特色をやはり角力道は持っている。衰退を盛り返すだけの根柢は確かにあるのである。にもかかわらず、現状ではまだ、協会員が、これならやって行けるという程度で、過去の如き、晴天十日を挙げて、市民を熱狂の坩堝に投げこむような活況にまで至らないのは、まだ何か、現在の一般性と、ぴったりしきれないひらきがそこにあるのではないか。

×

国技が、国技の古典を保守するほど、モダニズムの一般性とはひらきが生じてくる。その点絶えず、民衆を追って、民衆の進歩と、溶けあうことに苦労しているのは歌舞伎であるが、その歌舞伎にしても、すこし油断していると、識者から、亡びるぞと、絶えず警告の脅しをうけている。

×

場所の飾りつけや、協会などの、形態ばかりでなく、力士の質や、力士の精神にも、国粋とモダニズムの調和が健全にとれて来てから、初めて、ほんとの全盛期が来れば来るのではなかろうか。

×

彼は酒を何升飲むとか、体重が何十貫あるとか、そういうことで、一般に興味を持たれたり、ひいきに愛されたりすることは、力士の不幸である。どんなスポーツでも、現代人には、知識を通したものでなければ、熱狂することも、讃美することも、出来ないからである。

講演

政治運動や選挙の応援演説などには出たことはないが、偶々の文芸講演会には、気軽だけに体の都合さえよければ出てもよい気がするし、これまでにも、十回ほどは出てもいる。

×

なんどやっても苦手なのは講演である。日本英雄論だけでも数十ぺんやったという菊池寛でさえ、壇へのぼる前は負担で憂鬱になるという。大仏などもそうらしい。僕なども甚だ悔いることがある。だが、結果がよいと、活字という間接なものを経ずに聴衆者の心からじかにうける反射はわるい気持のものではない。要するに書斎人にはまだどこか民衆の素肌に馴れない羞恥感が多分なのであろう。久米正雄、小島政二郎などは例外な年増女のうまさではあるが。

×

菊池寛の講演というものはどこでもうける。訥々として稚弁であるが、聴衆者と膝ぐみになって、何ものかを根気よく呑みこませなければやまない。時々、笑わせて口を開かせながらその中へオブラートで投薬してやるという親切さがある。芥川龍之介も講演はうまかったというが、恐らくこういう民衆の心医ではなかったろうかと思う。

×

東北とか、関西とか、各地の都市で、講演会のある場合、一堂に集まる聴衆者の色と空気とは、実際によくその都市の文化の程度や郷土性をあらわしている。そして聴衆者の大部分は、地方都市のインテリ層で至極まじめに聞いてくれるが、その際、談合したり、世話をやいたり意見をたたく人は、多く新聞や出版関係の民間の人たちばかりで、地方の為政者などは、てんで無関心らしくみえる。

×

いったい具眼の為政者は、床次さんの浪花節鼓吹にかぎらず、常に地方の思想善導とか、文化開発とかをよく口にするが、こういう遠来の文芸の徒が、各地の民治の中をしゃべってあるく場合など、たまには、その県の官僚でもやってきて、大いに信念を語ったり、こっちの意見でもたたきそうなものだが、どこでもやって来たためしがない。今の地方為政者が、熱のないことは、これをみても分るような気がする。

東京人と海

海は夏よりも秋よりも春の今頃が最もいいと思う。それと花見気分の人があらさない浅春のうちがよい。蕪村のいう、日ねもすのたりのたりかな、都会的神経も眠気ざしてくるような磯のにおいがよい。

×

関西は海の旅行にめぐまれている。汽船などもいいのがあるし、釣りにも場所が多いし、いたる所に、海の安息所がある。

三原山が有名になったおかげで、東京の人たちも島をおぼえ、客船が新造されたりしているが東京湾のいい海浜は、たいがい要塞地になっているので、なかなか暢気にはあそべない。三浦半島なども、絶好なドライヴ・ウェーであるけれど、うっかりはいると砲台監守兵に叱られたうえ、始末書というようなことになる。

×

やはりしかたがないから、俗でもせせこましくても、熱海あたりへゆくほかはないのであるが、その熱海でさえも、別府のような暢気にはゆかない。俗悪な私娼街は近ごろ別府にもまけない程であるが、熱海では支那料理がたべられないというような実例がある。東京で有名なさる支那料理店が、支店を建築したところが、料理人は絶対に外国人をつかってはいけないというので、とうとう座敷てんぷらに看板をかえてしまった。

×

所詮、近海では、日ねもすのたりのたりというわけにはいかないと思って、よけいに、神経をとがらせて、東京へ帰ってみると、東京のまん中にも、要塞地があった。もっとも、衆議院の開期中だけではあろうが、警視庁の新撰組が、樫の棒をもって十字路に立っているのである。

×

洲崎や芝浦へ数歩の銀座は海岸の街であり、帝都は海にかこ

まれた帝都であるが、やんぬるかな、東京人士は海を持たない。

花・菜根

応接間の壺へ、花屋が来て挿花をかえていった。小皿ほどもある光琳菊の白いのと黄いろいのとが誇らしげに客に侍している。

『温室でしょうな』

と客がいう。

『西洋菊ですよ』

とある園芸好きの客が説く。

戸外には春の雪がふっているというのに室内では菊が咲くのだから面白いですなと世辞にいう人もあるが、自分には、いっかと面白くない、花屋の技巧だからしかたがないものの、出る幕でない時に、ぺちゃぺちゃしゃべりちらす口紅の女のように、つまんで部屋の外へ捨てたくなる。

×

花ばかりではない、冬でも、春でも、お椀のふたを取ると、さや豆が浮いているし、イチゴや西瓜も年中のものみたいに出るし、家庭の惣菜でさえ、三月といえばタケノコめし、キュウリといえば夏を待つまでもない。

×

天保頃には、キュウリの走りを食っても法令に罰しられた時世もあったが、こう四季のものが四季を無視して踊り子みたいにいつでも金で買える世の中も進歩かは知れないがうれしいものではない。

果物でも、たとえば鮎みたいなものでも、鰹でも、食味の世界に、現代の都市人は、四季のおどろきを失ってしまった。八百屋が春だといって来ても、魚屋が夏だといって来ても、待つ物はないし、感覚の新鮮さは一つもない。

×

眼や舌におどろきを失ったばかりでなく、あらゆる事象に容易におどろき得ないのが現代人の神経である。ドイツがどなっても驚かない、支那が急転向に親日になって来ても驚かない、軍部がひっそりと無口になっても驚かない、宗教流行にも驚かない、国本論の二分にも驚かない、ついには冬蚊にさされ、今頃ノミに食いつかれても驚かない皮膚ができるだろう。

×

さや豆や西瓜ばかりでなく、人間もそろそろ科学小説の中に出てくる器械化人間の世紀に入りかけて来たのじゃないか。

温泉雑景

十国峠へ向って自動車がのぼりかけると、熱海を中心としてあの附近一帯の山地には、到る処に井戸掘り丸太が散立している。湯河原の奥でも、伊東の先でも、箱根の上でも見かける丸太だ。

運転手にきくと、温泉を掘っているのですがとわらう。湯が噴けば小成金をつくるが、四百尺五百尺とボーリングをかけても出ない方が多いのは勿論である。そうなると、夜逃げ、乱闘、差押え、仲間割れ、さまざまな悲喜劇が起るのだという。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com